HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「エスニシティ」概観 : コンセプトの形成と理論的枠組
Author(s)	土田, 映子
Citation	219-239 グローバリゼーションと多文化共生, 国際広報メディア研究科・言語文化部研究報告叢書 68
Issue Date	2007-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52864
Rights	グローバリゼーションと多文化共生　第10章
Type	bookchapter (author version)
File Information	Ethnicity.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

国際広報メディア研究科・言語文化部叢書 66 号
第 10 章

「エスニシティ」概観

コンセプトの形成と理論的枠組

土田映子

はじめに

「エスニック」という言葉が、日本語の中に流通するようになってからすでに久しい。「エスニック風のインテリア」「エスニックレストラン」などの用例にみられるように、衣服・住居・料理などのスタイルについて、どこの国や地域という明確な指定があるわけではない、「日本人から見てエキゾチックな」特色のあるものをゆるやかに形容する単語として使われている。一方、この言葉の名詞形である「エスニシティ」は、日常語としては使われていないが、人類学・歴史学・社会学などの学問領域においては、今や分析枠組としての地位を確立した用語となったといえる。特に、多様な集団が並存する多文化・多民族社会についての研究を志す者にとっては、「エスニシティ」は研究上、重要な概念の一つとなっている。

この小論は、近年の人文・社会科学研究において重要な分析枠組の地位を占めるようになったエスニシティという概念について、その内容をめぐる主要な論考を紹介し、エスニシティの意味と研究上の意義を示そうとするものである。エスニシティという用語になじみの薄い読者一般にこの概念の基本的性質を伝えるという目的に加えて、これから人文・社会科学研究を志そうとする学生が、エスニシティをキーワードとして研究を始める際の一助ともなるよう願うものである。

社会科学における「エスニシティ」概念と用法

エスニシティという語は英語圏、特にアメリカ合衆国において、1970年代以降に学術用語として一般的に使われるようになった。現在、国際的な労働力の移動による移民の流入などによって各国で多文化・多民族社会化が進んでいることを背景に、ヨーロッパ・日本でもエスニシティ概念の使用は広がりを見せている。

日本ではエスニシティはまず、関連の語とともに文化人類学の分野で輸入され、慣用的に、エスニシティ（ethnicity）は「民族」「民族特性」、エスニック（ethnic）は「民族的」「民族の」と翻訳されてきた。けれども、それぞれの組み合わせの英語と日本語が指すものを全く同一と言うことはできないというのが現在研究者に共有されつつある認識である。[1]民族の定義は後に譲るとして、先にエスニシティの定義の例を見てみよう。例というのは、エスニシティの定義は研究者によってさまざまに異なっているからである。

ヨーロッパ、主にフランス語圏におけるエスニシティ概念の受容について論じた社会学者のマルコ・マルティニエッロは、「エスニシティとは、常時最低限の相互行為が行なわれている他の諸集団の成員と文化的に異なっているとみずから見なし、他者からもそのように見なされている、社会的諸行為者のあいだの社会関係の一側面である」としている。[2]また文化人類学者の竹沢泰子は、「エスニック集団あるいはその一部の構成員がそのエスニック背景に基づき意識的・無意識的に表す心理的・社会的現象」という定義を試みている。[3]エスニシティはしばしば、エスニック集団そのものや、またエスニックなアイデンティティ・感情・文化表象のあり方のすべてを指すものとして扱われるが、竹沢の定義はそうした一般的用法を踏まえたものといえるであろう。一方、マルティニエッロの定義は、エスニック集団の境界内の実体よりも集団間の関係にエスニシティの本質を見ようとするアプローチである。同

---

[1] 内堀基光「民族の意味論」青木保ほか編、岩波講座文化人類学第5巻『民族の生成と論理』（岩波書店、1997年）。
[2] マルコ・マルティニエッロ『エスニシティの社会学』宮島喬訳（白水社、2002年）27頁。
[3] 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティ：強制収容と補償運動による変遷』（東京大学出版会、1994年）13頁。

様の例は後で紹介するトーマス・ハイランド・エリクセンの論考にも見出すことができる。

このように曖昧さがつきまとう「エスニシティ」に比べて、より意味についての合意があるように見えるのが関連の「エスニック・グループ／エスニック集団」や「エスニック・アイデンティティ」という用語である。エスニック集団（ethnic group）は、「国民国家の枠内における文化的（場合によっては言語的）少数者」[4]、エスニック・アイデンティティ（ethnic identity）は「文化的に境界を画定された集団への個人的な帰属意識」[5]という定義があるが、これらは代表的な解釈と理解して差し支えないであろう。

「エスニシティ」の語源と内包される意味

「エスニシティ」（ethnicity）や「エスニック・アイデンティティ」（ethnic identity）という用語が広く使われるようになったのは、英語圏においてもそれほど昔のことではない。ジョン・ハチンソンとアンソニー・D・スミスは、現代のイギリスを代表するナショナリズムとエスニシティの研究者であるが、1996 年、エスニシティをめぐる主要な論考のアンソロジーを編纂・出版した。その序文においてハチンソンとスミスは、「エスニシティ」という語が最初に英語に現れたのはようやく 1950 年代になってからである一方、「エスニック」（ethnic）という語は中世から使われていたことを指摘している。その語源である古代ギリシアの言葉は、「共通の文化的または身体的特徴を持つ人々の集団」を指していたという。[6]また、前述のマルティニエッロによれば、古代ギリシア語のエトゥノス（ethnos） は、都市国家（アテネやスパルタのような）の政治的・社会的モデルを採用していなかった人々を指す言葉であり、その形容詞形であるエトゥニコス（ethnikos）は話者の所属する集団とは異なる集団＝「他者」、あるいは「異教徒」を意味するものであった

---

[4] 内堀基光「民族の意味論」9 頁。なお、内堀はこの定義を「アメリカ的用法」としている。ヨーロッパにおける ethnos（エトゥノスあるいはエトノス）は、国家的枠組の存在を必ずしも前提としていないからである。

[5] John Hutchinson and Anthony D. Smith," Introduction," *Ethnicity*, ed. Hutchinson and Smith (Oxford: Oxford University Press, 1996) 5.

[6] Ibid., 4.

という。[7]現代においても、「エスニック」や「エスニシティ」という用語が「自己－他者」の区別が行われる文脈の中で使われる場合が多いのは、このような背景による。

19 世紀に至り、「エスニシティ」「エスニック」という用語は、「人種」(race)の意味を含んで使用されるようになる。社会ダーウィニズムの流行を背景に、これらの用語は異なる人間集団の優劣を論ずる道具として使われるようになっていった。マルティニエッロは、「エスニシティ」「エスニック」やそれにあたる言葉がヨーロッパの研究者の間で近年までほとんど使われなかった理由として、19 世紀以来の人種差別的な思考枠組が、第二次世界大戦期のナチスドイツによるホロコーストという悲惨な結末に結びついたという認識があるためと解説している。一方、ヨーロッパから地理的に離れたアメリカでは、「エスニシティ」「エスニック」は「人種」とは異なる概念として切り離されて使われた。[8]特に 1960～70 年代のアメリカでこれらの用語の使用が広まった背景には、公民権運動を初めとするマイノリティの権利回復運動の高まりがあると考えられる。国民国家に所属しつつ、固有の歴史と文化を持つ集団として認知され、それを梃子に政治的・社会的・経済的地位の向上をめざそうとする多様な集団の関係性を捉えるという需要に、エスニシティおよびエスニック集団という概念は合致するものであったといえる。

「エスニシティ」と他の人間集団概念との関係

先に「人種」について触れたが、ここで「人種」を初めとする主な人間集団のカテゴリーについて、簡単に整理をしておきたい。前述のように、それぞれの用語の間だけでなく、英語と、その日本語訳とされているものの間にも意味の範囲の相違があることに注意が必要である。

・ 「人種」[race]

英語の race は 19 世紀まではしばしば、日本語でいう「民族」の意味で使われていたが、現在は「人種」、つまり人間の身体的（外見的）特徴による区

[7] マルティニエッロ『エスニシティの社会学』20-21 頁。
[8] 前掲書、21-22 頁。マルティニエッロは、「フランスでは、エスニシティはなお人種の婉曲語法と受け取られることが多」いと指摘している(22-23 頁)。

分を指す用法にほぼ限定されている。人種というカテゴリーの実質的意義については、学問分野間や研究者の間で意見の分かれるところではあるが、現在の社会科学においては、人種には生物学的分類としての意義はなく、社会的に構築された概念としてのみ意義を持つというのが支配的見解である。つまり、人間を人種というカテゴリーの下に分類したり優劣を論じたりすることが恣意的な作業に過ぎず、生物学的根拠はないということが共通の認識として研究者の間にあるにしても、現実社会において人々が世界を見るまなざしの中で人種という思考枠組が機能し、それによって実際の社会制度や人間関係に影響を与えている限りは、社会科学研究の中で有効な概念として扱われ続けるのである。

人種概念の問題点は、それが環境の変化や世代交代によっても本質的には変わらない、永続的なものとされたことに加え、特定の人種と能力的・人格的特質が結び付けられてきたことにある。このような人間集団の捉え方は、集団内の構成員の多様性や社会的環境・教育による影響を無視し、特定の集団を一様な存在であるかのように単純化する弊害を持っていることは、指摘するまでもないであろう。

・ 「民族」[race; nation]

「民族」は言語や宗教、習俗など、文化的・社会的特徴による区分で、一般的には、帰属が生得的に決定される（変えることができない）とされる。エスニック集団・エスニシティの概念が、集団の構成員の自意識や周辺の他集団からのまなざしに依拠し、互いに異なっているという集団間の認識のレベルによって決定される部分が大きいのに対し、民族は客観的観察によって定義が可能であるとされている。民族という日本語の由来はネーション（nation）の訳語であるが、以下にみるように、ネーションという語と完全に重なっているわけではなく、むしろその一部を表現しているのに過ぎない。[9]

・ 「ネーション」[nation]

「ネーション」はヨーロッパにおける民族研究で重要視されてきた概念である。前述のマルティニエッロの本を訳した宮島喬は、同書に付した解説の中

[9] 内堀基光「民族の意味論」5頁。

で、次のような定義を試みている:「歴史的な領域的定住者で、かつ自己決定への志向をもつ人びとの集合」(『エスニシティの社会学』165 頁)。ただし、自己決定への志向といっても必ずしもすべてのネーションが独立国家を目標としているわけではなく、自治権や文化的集団としての承認を求める場合など、そのあり方も多様である。[10]一方、日本語の「民族」概念と、それに関連するヨーロッパ語の意味を比較検討した内堀基光は、ヨーロッパにおいては「ネーションとエトノスは等値のものとしても使われるのであり、その違いは単に歴史的な用語法上のものにすぎない」、「時代を下るにしたがって、人びとの観念のなかでネーションと国家との結びつきが強まり、ほとんど不可分というほどにまでなった」と指摘し、ネーションという概念の多義性を示した。[11]これらのことから、ヨーロッパにおけるネーションは、日本語の「民族」「国民」「国家」のどれにもなり得る複合的概念であることが分かる。

「エスニシティ」概念へのアプローチ

「エスニシティ」とは何かという問いに対しては、しばしば、「エスニック集団」あるいは「エスニック・コミュニティ」の特質である、という説明がなされてきた。ここでは、リチャード・シャマーホーンが 1970 年の論考で行ったエスニック集団についての定義を見てみよう。

> エスニック集団をここで定義しておくと、より大きな社会の中にあって、実際のあるいは推定上の共通の祖先と、共有する歴史的過去の記憶を持ち、彼らの民族性（peoplehood）を典型的に表しているとされる一つまたは複数の象徴的要素に文化的焦点を置いているような一集団であり（中略）不可欠な点として、構成員がその一員としての自覚を持っていることが挙げられる。[12]

---

[10] 宮島喬「訳者あとがき」マルティニエッロ『エスニシティの社会学』165 頁。
[11] 内堀基光「民族の意味論」6 頁。
[12] Richard Schermerhorn, *Comparative Ethnic Relations* (New York: Random House, 1970). *Ethnicity*, eds. Hutchinson and Smith, 17.

上記のように定義されるエスニック集団（あるいはエスニック・コミュニティ)が生成する過程については､多くの考察がこれまでに行われてきたが、それらはおおむね四種類の異なるアプローチとして分類することができる。そのうちの二つ､「原初性論者」（primordialist）的アプローチと「用具論者」（instrumentalist）的アプローチは、互いに対極をなすものといえよう。原初性論者は、エスニックなコミュニティは、宗教・血縁・人種・言語といった社会的紐帯によって形成され維持されるものという立場を取る。この時、これらの社会的紐帯は、原初的なもの、言い換えれば、あらかじめ与えられ必然的に愛着を伴うものとみなされる。他方、用具論者は、エスニックなコミュニティというものは、個人――特にエリート的地位にある者――が、自らの利益を追求するために使う手段であるとみなす。この二つの他には、社会人類学者の間で支持の多い「交流論者」（transactionalist）的アプローチや､アンソニー･D･スミスが提唱する「エスノ=シンボル論」（ethno-symbolic）的アプローチがある。交流論者は､異なる集団間の交流によってエスニック・コミュニティが形成されるとする立場である。エスノ=シンボル論は、歴史に関する神話・記憶・シンボルなどの共有がエスニック・コミュニティを特徴づけるとする議論である。

以下の項目では､上記の四種類のアプローチにおける主な論考を概観する。

原初性論によるアプローチ

原初性論の立場からエスニシティについて論じた研究者としては、人類学者のクリフォード・ギアーツがよく知られている。ギアーツは多民族・多言語の諸国の経験を観察し、そうした国々の不安定さは、その国民の自意識が「血、人種、言語、地域性、宗教、また伝統」と分かちがたく結びついていることから発生すると考えた。ギアーツはこれらの要素を「原初的愛着」（primordial attachments）と呼び、以下のように論じている。

> 原初的愛着とは、社会的に存在する上での「与件」（givens）――より正確に言えば、文化というものは必然的にそうしたものと関わっているのであるから、前提とされている「与件」――に由来するものである。主とし

ては、ごく近くの隣人や親族のつながりであるが、それらを超えて、ある特定の宗教コミュニティの中で生まれたとか、特定の言語、あるいは特定の方言を話すとか、特定の社会慣習に従っているとかいうことに由来する与件性がある。こうした血縁・言語・習俗その他の共通性は、言い表しようもない、そして時に抗い難い強制力を内に持っているとみられている。（中略）人がその人の親戚、隣人、宗教を同じくする者に結びつけられているのは、ただそれらの事実によってのみなのである。（中略）少なくとも多くの場合、何か説明しようのない絶対的な重要性が、その紐帯そのものにあるとされている。[13]

エスニシティを「与件」（あらかじめ与えられたもの）とし、エスニックな感情を「言い表しようもない」「説明しようのない」とするギアーツの議論は、さまざまに反駁されてきた。ギアーツは、エスニシティを変わることのないものとして捉えているが、現実には、人々は時と場所に応じて異なるアイデンティティを引き受けるものであることが観察されている。つまり、エスニック・アイデンティティは、環境の変化に従って発達したり変容したりすることが可能ということである。

用具論によるアプローチ

一方、用具論と呼ばれるアプローチは、まさにその性質、エスニック・アイデンティティの可変性を重視するものである。用具論者によれば、人々はそれぞれのニーズに合わせて、エスニック文化の要素を選択的に取り入れたり組み合わせたりすることができるというのである。

政治社会学者のポール・R・ブラスは、エスニック・コミュニティとは特定のエリート層が、時代状況が大きく変化していく時期に創造するものであると論じている。ブラスによれば、政治権力と経済的利益をめぐるエリートや権力者の間の競争が第一の動機となって、エリート層は一般大衆の間のエ

[13] Clifford Geertz, “Primordial Ties,” *Ethnicity*, ed. Hutchinson and Smith, 41-42. 初出：“The Integrative Revolution,” Geertz, ed., *Old Societies and New States* (New York: Free Press, 1963).

スニックな自覚の覚醒を促し、彼らを自らの目的のために動員していくのだという。このような文脈の中で、ブラスはエスニシティを次のように定義づけている。

> 人の集団が、文化の任意の側面を主観的、記号的、あるいは象徴的に用いることにより、内部的結合力を創出し、他の集団と自分たちとを差異化すること。[14]

エスニック・コミュニティは、その一員としての自覚が構成員の間に芽生えたところに現れるという考え方である。それに加えて、社会的・経済的地位やそれらの承認も、エスニシティやエスニック・アイデンティティにはからんでおり、従ってブラスは、「エスニシティとエスニックなカテゴリーとの関係は、階級意識と階級との関係と同じである」とみるのである。[15]
「文化の任意の側面を主観的、記号的、あるいは象徴的に用いること」、またはブラスの別の言い方を借りれば、「特定の方言や宗教的慣習や服装の様式や歴史的シンボルなどを、さまざまな引用可能な選択肢の内から選び取ること」は、社会の特定の層を利するやり方で行われる。エスニック・コミュニティは、社会が急速に近代化していく時にエリートによって創出され、変容させられる。なぜなら、そのような状況下では、限られた資源をめぐる争いが顕在化するからである。競争に打ち勝つために、エリート層は一種の利益集団としてエスニック・コミュニティを利用するのである。

ブラスによって代表される用具論的アプローチは、社会的アイデンティティを社会的・歴史的構築物であるとするポストモダン的思潮を反映している。用具論的アプローチは、原初性論的アプローチによるエスニシティの静的な見方を脱しているものの、エスニックな結束が呼び起こす感情の強さについ

---

[14] Paul R. Brass, "Ethnic Groups and Ethnic Identity Formation," *Ethnicity*, eds. Hutchinson and Smith, 85-86. 初出：Brass, *Ethnicity and Nationalism* (New Delhi, Newbury Park, London: Sage Publications, 1991). ブラスによれば、この定義は一部、George de Vos の定義を踏まえたもの。

[15] Brass, "Ethnic Groups and Ethnic Identity Formation," *Ethnicity*, ed. Hutchinson and Smith, 86.

ては説明ができないという弱点を批判されてきた。

原初性論が、歴史を経て発展してきた文化的遺産の継承の面からエスニシティやエスニック・コミュニティの由来を説明してきたのに対し、用具論は、歴史的状況への反応としてエスニック・コミュニティが形成されるという面に注目してきた。第三の理論である交流論的アプローチでは、集団と集団の間の関係と、それらの集団間の境界が形成・維持される仕組みに焦点を当てるものである。

交流論によるアプローチ――相対性と他者性

エスニシティを定義する試みは、主に社会人類学者によって担われてきた。その試みの中で常に強く意識されてきたのは、「自己―他者」の区別をめぐる問題である。たとえば、エリザベス・トンキン、マリオン・マクドナルド、マルコム・チャプマンは共著論文の中で、次のように述べている。

> 二つの異なる集団が出会う状況において、その片方だけを「エスニック集団」と呼ぶのが適切と一般的に受け止められている場合、「エスニック集団」の定義が双方に関わるものであることは明らかなのに、ある種の概念的かつ実際的な共謀が行われていることになる。「対置」状況には双方の存在が必要だからである。（中略）従って、このような状況下で形成される種類の集団について我々が使用する用語は、すべての当該集団について難なく適用できると考えるべきであろう。だが、「エスニシティ」は現在までのところ、このような意味で社会的に中立な言葉としては捉えられてこなかった。[16]

トンキンらはさらに、「エスニック集団」という用語がしばしば、「人種」という用語の倫理的・政治的に安全な同義語として使われているのにも関わらず、「人種」よりもむしろ強い「自己―他者」間の区別の意味を含んでいる

---

16 Elizabeth Tonkin, Maryon McDonald and Malcolm Chapman, “History and Ethnicity,” *Ethnicity*, ed. Hutchinson and Smith, 23. 初出：Tonkin, McDonald and Chapman, *History and Ethnicity* (London: Routledge, 1989).

と指摘する。誰もがある人種に属しているといえる一方で、誰もが「エスニック集団」に属していたり、「エスニシティ」を持っているわけではない。少なくとも、これらの語が実際に使われる場面では、そうした含意があることは否めない。従って、「エスニシティという用語は、相対性の文脈において、つまり同一化の過程においてのみ意味を持つものといえる。（中略）それは渋々ながらも誰もに関わる現象を表そうとする用語ではあるが、語彙の中では、異質さとか未知であることを示す標識として定着してしまっている」のである。[17]

トンキンらの議論からもうかがえるように、相対性と他者性は、エスニシティの概念を考える上で重要な要素である。この二点について、トーマス・ハイランド・エリクセンは著書『エスニシティとナショナリズム』の中で詳細に論じている。エリクセンはこの本で、人類学的視点からエスニシティの概念的問題点に切り込んだ論考としては代表的といえる分析を行っている。以下はエリクセンによるエスニシティの定義である。

> エスニシティは自らを固有だと見なしている行為者間におこる社会関係の一つである。かれらは最低限の日常的接触があり、それぞれに他集団の成員とは文化的に異なっていると考えている。それゆえ、比喩的あるいは想像上の親族関係によって特徴づけられる（対他者に基づく）社会的アイデンティティであるとも定義できる。[18]

この定義からも明らかなように、エリクセンはエスニシティ概念における相互性に注目している。エリクセンによれば、エスニシティは二つの集団が互いに相手を別集団とみなす状況において現れるものである。片方のより優位な集団が自集団をエスニックな観点からは「中立」と考え、他方を「エスニック」であると考える状況では、エスニシティは生まれない。エスニシテ

---

[17] *Ethnicity*, ed. Hutchinson and Smith, 22-24.
[18] トーマス・ハイランド・エリクセン『エスニシティとナショナリズム　人類学的視点から』鈴木清史訳（明石書店、2006 年）39 頁。原文：Thomas Hylland Eriksen, *Ethnicity and Nationalism: Anthropological Perspectives* (London: Pluto Press, 1993) 12.

ィという用語が一般社会で使われる場合には、「マイノリティ問題」や「人種関係」という響きを持ちがちではあるものの、「多数派（マジョリティ）や支配的（ドミナント）な人びとも同じようにエスニックである」とエリクセンは指摘する。[19]

エリクセンが明確にしているのは、二つの集団の間の文化的相違がエスニシティの決定的特徴ではないということである。ある集団の構成員にエスニックな意識が芽生えるためには、他集団とどう違うかということではなく、違いが存在するということが認識されることが重要なのだ。さらに、集団間の接触があるということも必須条件である。エリクセンの要約によれば、「エスニシティは『我―彼』（二分化）『と』エスニック間の言説と相互作用にかかわる共通の場（相補性）を生み出すのである」（強調原文）。[20]

エリクセンのエスニシティ概念の捉え方は肯定的なものである。エリクセンは、エスニシティの概念は「集団間の接触や相互共存についての動態的状況を示唆する」ため、変転する複雑な世界を人類学的に分析する上で非常に有用であるとしている。[21]人類学研究の流れが、文化集団を静的で孤立した存在から動的で流動的な存在としてみる方向へ変わってきたことを受け、「エスニック集団」という用語は、「部族」といったような古くからの用語よりも適切なものと考えられるようになってきた。「エスニック集団」という用語は、異なる集団間の接触や関係性を含意するのみならず、「これらの集団や範疇は、いってみれば接触そのもので『創造されている』」ことを示している（強調原文）。[22]

F・バルトのエスニック境界理論

20 世紀中盤から、人類学者たちはエスニック集団の研究において、文化の

---

[19] エリクセン『エスニシティとナショナリズム』25 頁。原文：Eriksen, *Ethnicity and Nationalism*, 4.
[20] エリクセン『エスニシティとナショナリズム』65 頁。原文：Eriksen, *Ethnicity and Nationalism*, 28.
[21] エリクセン『エスニシティとナショナリズム』35 頁。原文：Eriksen, *Ethnicity and Nationalism*, 9.
[22] エリクセン『エスニシティとナショナリズム』36 頁。原文：Eriksen, *Ethnicity and Nationalism*, 10.

内容よりも社会的交流や組織のあり方を分析の焦点とすべきであると論じてきた。エリクセンの論考は、人類学の分野における過去数十年のエスニシティに関する議論を集成したものともいえるだろう。

エリクセンによれば、エスニシティの人類学的研究のうちで最も影響力が大きかったのは、フレドリック・バルトの 1969 年に出版された論考であった。バルトは、エスニック集団を文化集団とみる従来の説を批判し、各集団の持つ文化ではなく、集団間を分ける境界に注目すべきだと論じた。バルトがこの論考を執筆した時点では、人類学の分野では、エスニック集団は集団としての特徴によって理解されていた。エスニック集団であることを示す主要な特徴としては、生物学的に存続できること（世代交代ができること）、構成員が基本的な文化的価値を共有していること、伝達・相互作用の場を形成していること、そして集団の一員であることを自認する構成員から成ることが挙げられていた。[23]この定義は、実際に研究対象の集団を観察した時の経験的観測とよく合致していると考えられたため、多くの人類学者がこれを研究の枠組として使用していた。

バルトが批判したのは、上記の定義の内容というよりも、エスニック集団を研究する際に上記の定義にあるような特徴を前提としてしまう、そうした主流の考え方であった。バルトは、そのような定式化された考え方は、「境界の維持はたやすいことで、箇条書きで並べられるような特徴――人種的相違、文化的相違、社会的分離と言語的障壁、自然発生的または計画的反目――が含意する（集団の）孤立性に当然ついて来るものと決め込むもとになる」と考えたのだった。[24]言い換えれば、上記のようなエスニック集団の概念をそのまま受け入れる研究者は、エスニック集団を、各集団が互いに孤立した状況の中でそれぞれの文化的特徴を発展させていくものと捉えており、集団間の境界は自然に維持されるものと考えていたのである。そうではなく、集団構成員に共有の文化は「エスニック集団機構の基本的かつ定義的な性質というよりも、むしろ二次的について来るものであり、結果である」とバルトは

---

[23] Fredrik Barth, “Introduction,” *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*, ed. Fredrik Barth (Boston: Little, Brown and Company, 1969) 10-11.
[24] Ibid., 11.

指摘した。[25]もしもエスニック集団の文化的側面が強調されるのであれば、研究者は文化の内容を分析するのに終始し、「エスニックな機構」、つまりエスニック集団の「起源、構造、そして機能」に注意が向けられることはなくなってしまうというのである。[26]

エスニック集団のこうした側面を理解するために、バルトは「社会的に有効」なものに注目するよう提案している。

> 考慮に入れるべき特質とは、「客観的な」相違の総体ではなく、行為者自身が意味のあるものと考えているものでなくてはならない。(中略)ある文化的特質は行為者によって相違を表す記号や象徴として使われ、別の特質は無視され、そしてある種の関係においては根本的な違いが薄められ、否定されるのである。[27]

エスニックな単位の存続は境界の維持に依存している。なぜなら、文化的内容や構成員の変化が直ちにエスニック集団の解体にはつながらないからである。エスニック集団の起源と継続性について理解するためには、「構成員と部外者の間の継続的な二分化」こそが検討されねばならない。[28]

エスニック集団内の文化に代わり、エスニック境界の概念が強調されるべき分析の視点となると、エスニシティ研究の焦点となるのはエスニック集団間の関係ということになる。バルトによれば、重要なエスニック集団間関係の一つは、文化的差異が持続する形で交流が行われる方法を作ることである。

> エスニック集団間の安定した関係は、そのような相互関係の構築を前提としている。集団の接触する状況を管理する規範体系があり、行動の一部の領域や範囲では互いに連合することを許し、そして他の領域ではエスニック間の交流を防ぐような、社会状況における禁止の体系がある。こうしたことにより、それぞれの文化のある部分を衝突や変容に対して防護して

[25] Ibid.
[26] Ibid., 11-12.
[27] Ibid., 12-13.
[28] Ibid., 14.

いる。[29]

言い換えれば、接触状態にある複数のエスニック集団は共同で、交流の場とそのディスコースを指定し、集団間の境界を定義し直したり強化したりし続けているのである。

創られたエスニシティと過程としてのエスニシティ

歴史学の分野においても、1980 年代以降、多くの研究者がエスニック集団間の境界形成の過程に関心を払ってきた。ウェルナー・ソローズは、研究論集 *The Invention of Ethnicity*（1989）の序文で、エスニック集団についての歴史研究はもっぱら「ある前提」の上に行われており、原初性論的なエスニシティの把握がされてきたと指摘した。エスニック集団は典型的には、特有の文化的特性を備えた固定した単位と見なされ、より大きな社会への同化の圧力はエスニック集団への脅威とされた。ソローズの議論によれば、そうしたエスニシティ観に基づく研究群は、「より広範に共有されている歴史的条件や文化的特性、つまり動的な相互交流と混交」を研究の観点に含めることができないという弱点がある。[30]この分析は社会人類学における交流論的な考え方の発展を踏まえているものであろう。

ソローズはさらに、エスニシティは「近代の産物」と考え得ることを指摘している。『エスニシティの創造』というこの本の題名は、エリック・ホブズボウムの有名な編著書『伝統の創造』を意識したものであろうことは誰しも気づくことだが、ソローズの指摘はホブズボウムが「伝統」を近代の産物と論じたことと重なる。[31]ただし、ソローズはエスニシティを、何もないところから近代が発明物として創り出したものと論じているわけではない。「その近代性やエスニック集団の境界を越える互換性を知ることにより、エスニッ

---

[29] Ibid., 17.
[30] Werner Sollors, “Introduction: The Invention of Ethnicity,” *The Invention of Ethnicity*, ed. Werner Sollors (New York: Oxford University Press, 1989) xiii-xiv.
[31] Eric Hobsbawm and Terence Ranger, eds., *The Invention of Tradition* (Cambridge: Cambridge University Press, 1983). 邦訳：エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編著『創られた伝統』前川啓治、梶原景昭訳（紀伊國屋書店、1992）。

クな現象と同様に特定の文化的テクストについての我々の理解をも豊かにする」ことができるのではないかとの考えのもとに、エスニシティと近代との関係に注目しているのである。[32]ソローズのまとめによれば、近代的またポストモダン的文脈におけるエスニシティの解釈とは、以下のようなものである。

> エスニシティは歴史的過去から生き残っている旧(ふる)く根深い力であるというよりもむしろ、それが属しているはずの境界内をはるかに越えて共有され得るある対照的な戦略の近代的かつ近代化を促す特質である。(中略)エスニシティはモノではなく、ある種の過程であり、それを読み取ろうとする者は絶え間なく探偵のように頭を働かさなければならない。想定上の文化的に重要な要素の、固定された百科事典のようなもので満足してしまうわけにはいかないのだ。[33]

エスニシティをこのように流動的で変化する人間の特質とする見方は、いくつもの分野で支持されている。スチュアート・ホールによる「アイデンティティ」についての議論もそうしたエスニシティ観を表しているものの一つである。カルチュラル・スタディーズの創始者であるホールは、エスニック・アイデンティティが発現するのは、「他者」との相違が感知され、政治化される時であると述べている。人が自分のエスニシティを認識することには通常、過去の回復が伴うが、エスニシティと過去との関係は散発的に表面化するものではなく、歴史的かつ政治的に構築されるものである。「それは部分的には記憶により、また部分的には語りによって再発見される関係である。それは文化的再発見の行為である。」[34]ホールによれば、エスニック・アイデンティティを含むどんなアイデンティティも、決して固定することのない「同一化の過程」として考えるべきなのである。

---

[32] Sollors, "Introduction," xv.
[33] Ibid., xiv-xv.
[34] Stuart Hall, "Ethnicity: Identity and Difference," Geoff Eley and Ronald Grigor Suny, eds., *Becoming National: A Reader* (Oxford: Oxford University Press, 1996) 344-48. 初出：*Radical America*, 23.4 (October-December 1989).

文化的イコン・象徴・英雄の役割――エスノ＝シンボル論

エスニシティを論じる多くの論考は、エスニック・アイデンティティを維持する役割を持つものとして、エスニックな文化的要素の象徴性を取り上げている。その内容は、おおまかには次のように整理できよう。

(1) 文化的イコン（icon: 聖像、偶像）はナショナルな、またエスニックな凝集力を表象・維持するのに使われ、集団としての結束力を高めると同時に、構成員と他者とを差異化する。文化的イコンとなるのは、長い歴史を通じて伝えられてきた伝統や神話などである。その一方で、時代ごとの社会的要請に応じ、文化的イコンは内容に手が加えられたり、全体が変容したり、また材料として使用可能な文化的出典を使って新たに創られたりするものでもある。

(2) そのような社会的要請は、社会が急速に変化している時に最も起こりやすい。たとえば、近代化や産業化が進行しているときである。

(3) 文化的出典の選択は、主に社会のエリート層や知識人層によって行われるが、出典そのものはそうした社会層に由来するものとは限らない。事実、頻繁に利用されるのは民衆の（vernacular)、言い換えれば大衆層の文化的要素である。

上記のうちどの点を重視するかは、それぞれの研究者がどのようなアプローチを採用しているかによる。用具論の立場からエスニシティにアプローチする研究者の見方では、文化的イコンの象徴的意味は政治目的のための道具のようなものである。アブナー・コーエンはこの立場から、「伝統的習俗は単に慣用として、また政治的提携のための仕組みとして使われているに過ぎない」と述べている。[35]

文化的イコンの役割について最も充実した論考を行っている研究者の一人として、アンソニー・D・スミスが挙げられる。スミスはエスニック集団やネイションの形成に際して、神話・記憶・価値体系・伝統・象徴といったも

[35] Abner Cohen, "Ethnicity and Politics," *Ethnicity*, ed. Hutchinson and Smith, 84.　初出：Cohen, *Custom and Politics in Urban Africa* (Berkeley: University of California Press, 1969).

のの持つ役割を重視している。これがエスニシティへのエスノ＝シンボル論的アプローチである。象徴に含まれるものとしてスミスが挙げているものには、「紋章・賛歌・祝祭・居住環境・習俗・言語的コード・聖なる土地など」があり、これらは「解放・移住・黄金時代（一度あるいは複数回の）・勝利と敗北・英雄や聖人や賢人についての」共有の記憶とともに、「強い差異化の力を発揮するものであり、エスニック・コミュニティの唯一無二の文化と宿命を思い出させるもの」である。[36]スミスの見解では、これらの象徴や記憶は人々をエスニック・コミュニティとして、またネイション（民族・国民）としてまとめている媒体である。他方で、そのような文化的資源を持たない人々が、エスニック集団（スミスの用語では「エトゥニー」ethnie）やネイションの状態で維持されるのは困難である。近代国家は上記のような文化的イコンに引きつけられる傾向が強いが、それは文化的イコンが「官僚政治的な合理主義の没個人性を軽減するもの」のように見えるからであろうと、スミスとハチンソンとの共著論文の中に述べられている。[37]

エスニシティへのエスノ＝シンボル論的アプローチについて、今後議論されるべき問題の一つとしては、文化的イコンとなっているものがそのようなものとして認知されるに至る仕組みの解明が挙げられるであろう。社会の限られた階層の人々によって創られた文化的イコンは、どのようにしてナショナルなあるいはエスニックな社会全体の象徴としての地位を獲得するか。また、象徴を立てる行為や運動の成否はどこで決まるのか。こうした点を明らかにすることが、エスノ＝シンボル論の有効性を計る一つの手段となると考えられる。

エスニシティ概念と社会科学研究の事例

以上、エスニシティについての代表的な四つの理論的枠組を紹介してきたが、これらの枠組は新しいものによって旧いものが全く取って代わられたり、

---

[36] Anthony D. Smith, *Nationalism and Modernism: A Critical Survey of Recent Theories of Nations and Nationalism* (London: Routledge, 1998) 191.

[37] Hutchinson and Smith, "Introduction," *Ethnicity*, ed. Hutchinson and Smith, 10.

相互に排除し合ったりするものではない。マルティニエッロやエリクセンに代表される、集団間の相互の認識と交流から生成・維持される境界に分析の焦点を置くエスニシティ観が現在は主流となっているが、「実在論的」と批判されるギアーツの原初性論的アプローチも、文脈によってはまだ有用な視点を提供してくれるのである。

原初性論を含めた複数の枠組を活用した研究の例として、前述の竹沢泰子がワシントン州の日系アメリカ人について行なった研究が挙げられる。竹沢は、日系移民の一世から三～四世へと至る世代交代の間に起こったアイデンティティの変遷について論じた中で、一世のエスニシティはギアーツのいう「原初的愛着感」によって特徴づけられるとしている。「一世にとって『日本人』と定義するものは、日本人の両親を持ち、『日本民族』に生まれることによって生得的に持つと彼らが信じる、共有の人種的、文化的特性であった。」（強調原文）[38]これら「与件」としての特性への原初的愛着から、エスニック集団としての日系アメリカ人が形成されたという観察である。時代が下って、第二次世界大戦時の日系人強制収容に対する補償運動が 1970 年代後半に広がり出すと、収容所を象徴する鉄条網や、星条旗の図案が運動のシンボルとして用いられるようになる。これらのシンボルが新しい世代のエスニシティの形成に深く関わったという観察は、スミスのエスノ＝シンボル論の立場と重なるものであろう。[39]

エスニシティと他の分析枠組との関連

近年の社会科学研究では、社会構造を織り成す多様な関係性をより精緻に分析する視点がますます求められるようになってきている。エスニック集団・民族・ネーションはすべて、共通の歴史・言語・習俗・宗教・血縁などの文化的要素を基盤にした人間集団のカテゴリーであるが、個人のアイデンティティが多層的に成り立ち、かつそれぞれの層は有機的に結びついていることを考えれば、これらの基盤的要素だけの考慮では不十分である。過去およそ 30 年にわたり、エスニシティは次第にその内包する意味を変化させな

[38] 竹沢泰子『日系アメリカ人のエスニシティの変遷』218 頁。
[39] 前掲書、221 頁。

がらもなお、社会科学研究に有用な枠組として流通し続けているが、階層・階級、ジェンダーなどとの関係が近年においては特にクローズアップされている。用具論的アプローチが指摘するように、エスニック集団の構成員は皆が政治的・社会的に平等な立場にあるわけではなく、エスニシティの構築がもたらす（あるいはもたらすことが期待される）効果を享受する程度には格差がある。その差はしばしば、エスニック集団の境界を越えて存在する階層・階級やジェンダーの相違によって発生するものである。

アメリカの多民族・多文化社会を捉える視点として登場したエスニシティは、日本やヨーロッパ各国の今の現実を分析するツールとして受容されつつある。一方で、マルティニエッロが指摘したように、エスニシティを旧来の人種というカテゴリーを脱政治化しようとする語り直しとして警戒する人々も少なからず存在する。その差別性から放棄されたはずのディスコースが、エスニシティという新たな用語を得てよみがえるのである。その危険を回避するには、人種、さらには民族のカテゴリーにつきまとう運命論的見方に抗し、交流論的アプローチが強調する人間集団間の関係の柔軟さや流動性に、留意し続ける必要があるであろう。